

その少女の家は川の向こう  
水車小屋への木橋を渡り  
大きな桜の木のある水神さまの  
前の道を過ぎるとすぐのところ  
季節の草花に飾られた重厚な大尺さまだった

夕立が来そうになると

少女はカンナの赤い花びらのように  
背の鞆のふたを白い被服に波打たせて走った  
雨あがりの雫は青い両脚をしなやかに震わせた

生まれてすぐ父親が比島で戦死してしまい  
母子ともに実家に戻った

その後教師だった母は再婚することになり  
少女は祖父母に預けられることになった

影や皺のない風があたり一面に広がると  
明るく利発な少女は向日葵のように  
夏からつぎの夏を想い描いた

顔いっぱい種子が斜陽に首をかしげるところ  
焰の中に青白い炎の芯を構成してみせた

学校一番の少女の家の庭には鞆ブランコがあつて

サルビアの植え込み越しに  
遠くゆつくり漕いでいたりした

少女がさよならと手を振り合図しても

その家の前で少年たちは声も出せず  
ただ下を向いて過ぎるのであつた